

# 夕張岳を国の天然記念物へ！

—指定の受け皿づくりを目指した市民運動—

みずお・きみお  
栗山町の農村育ち、主婦。  
子育て中に「夕張おや子劇  
場」の事務局長、運営委員  
長として自主活動を実践。  
夕張岳に魅せられて、地域  
の文化と自然環境を考える  
市民運動にかかわる。

## 水尾君尾



写真1 ユラパリコザクラ

はじめに

夕張岳（一、六六八㊦）の国の天然記念物指定（以下では単に「指定」と記述する）に向けて、一九九四年九月、地元の南富良野町から要望書が提出された。夕張市は一九九〇年三月、既に「条件つき」ながら要望書を提出しているため、富良野別道立自然公園の指定四〇周年を迎えて、やっ

と地元からの指定要望書が出揃うことになった。北海道営林局は、地元の合意があった九月に、「指定」のための現地検討登山を実施した。この年、夕張営林署は登山口の橋、駐車場および管理道路を整備し、夕張市は緊急保護作業として看板とコースロープを設け、夕張山岳会は木道を設置していた。地権者である営林局は、現地で色々な保護対策が講じられている実態に印象を良くして、早速動きだしている。

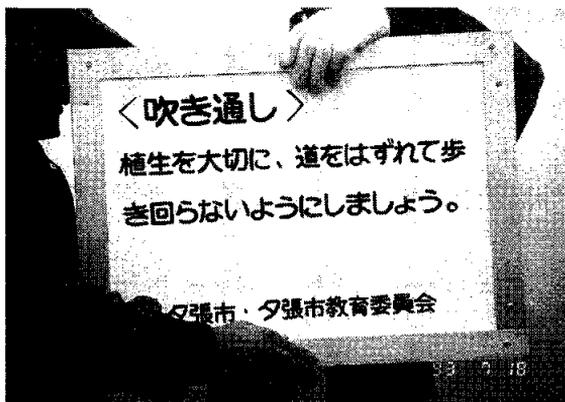


写真3 緊急保護作業、夕張市による吹き通しにて 1993年7月



写真2 夕張市による保護作業看板とロープ設置吹き通しにて 1993年7月

他方、北海道教育委員会では、植生総合調査報告書を発行した一九九二年に「指定区域の素案」を提示しながら、今なお遅々として「関係諸機関と協議、精査中」という状態を続けている。

私たちは、進まぬ「指定」に対して「どこで、何が詰まっているのか」、情報の収集と整理を続けている。また、夕張市が提出した要望書の「付帯条件」を乗り越えるため、関係機関にたびたび足を運び、地元の熱意を届け続けている。「指定」のためには、地元である夕張市と南富良野町、北海道の教育委員会と営林局、国の文化庁と林野庁が、それぞれの役割を超えて積極的に手を差し伸べあうような協議が必要である。私たちは、停滞している機関を動かすパイプ役を果たしながら、「指定」の早期実現に向けての市民運動を続けている。

### 夕張岳の魅力

一般登山者にとって「楽しい山」とは、体力的・技術的に平易な山であること、眺望が優れていること、そしてお花畑のすばらしさを含めて自然が多彩であることの三条件が必要と言われている。この三条件を満たす夕張岳は、それだけではなく、研究者や専門家によってその特殊な地質、植物、動物などが早くから注目され、数多い文献が発表されてきた。しかし、不思議なことに、専門家や学者が花の名山とうたい、多くの論文を示してきたにもかかわらず、高山植物に保護の手はなく、危機にさらされたまま、道立自然公園として今日に至っている。

北海道教育委員会の調査報告書によると、夕張岳の特徴である高山帯は、地形、地質的に本峰間

の東西二<sup>キリ</sup>の蛇紋岩台地、および夕張川と空知川の各源流部の蛇紋岩崩壊地急斜面に三区<sup>キリ</sup>分でき、それぞれの地形域にそれぞれ独特の植生が展開している。

植物相は五七〇種以上数えられており、夕張岳固有種は、ユウバリコザクラ、シソバキスミレ、ユウバリソウ、エゾノクモマグサ、ユウパルクモマグサ、タカネエゾムギ、エゾコウボウ、コミヤマキンポウゲ、ユウバリシャジン、ユウパリアズマギク、ユウバリカニツリ、ユウバリミセバヤの一二種と豊富である。わずか一〇平方<sup>キリ</sup>の面積の高山帯では、風衝地群落、雪田群落などにおいて構成種が多く、しかも群落の組合せが多彩である。ナキウサギも生息しており、夕張岳は、氷河時代の遺存種が生活する豊かな自然の宝庫なのである。自然保護の自然性、多様性、稀少性の価値から、夕張岳は、アポイ岳（昭和一四年国の天然記念物に指定され、同二七年に特別天然記念物に格上げされる）を凌ぎ、二二三万<sup>キリ</sup>の面積を誇る大雪山国立公園に匹敵するとまとめられている。

昆虫相については、地元研究者らにより、ヒメギフチョウなどの蝶類五一種、蛾類四八三種、カミキリ類二六種などが記録されている。野鳥類も含めると、夕張岳の山麓でも、未知の魅力が十分秘められているという。

### 夕張岳のリゾート開発

神秘的なただずまいであった夕張岳では、一九八〇年代よりリゾート開発の波が押し寄せるようになった。三菱グループ、国土計画（現コクド）の大手企業が極秘にリゾート開発構想をもち、それらに関する調査は公然の秘密になっていた。

夕張市は、国のエネルギー政策の転換によってすべての炭鉱がなくなると予測し、「タンコウからカンコウ」へ政策の転換をはかり、観光開発を目指したのもこの頃だった。そして、一九八六年から気象状況、動植物の分布状況、自然景観への影響評価調査を行ない、三年間で一億二千万円を費やした。この夕張岳周辺の大規模リゾート開発に対して、一九八八年に国（通産局）から産炭地支援事業の環境調査費三千五百万円と、北海道から産炭域活性化プロジェクト促進費千七百五十万円の補助金が出ている。このように、国や道の事業化促進補助金が認められたことから、地元では開発に一層の弾みがつくと期待し、夕張岳のスキー場開発こそ今後の夕張市存亡の「錦の御旗」であると、バラ色の夢を描いたのである。

こうした計画が水面下で行なわれていることに危機感を持ち、今村明信氏（当時北海道自然保護協会理事）は「夕張岳ワールドスキー場が覆面のまま進められている」と厳しく批判し、計画の公表を迫っている（北海道自然保護協会誌、第二七号、一九八八年）。同年この計画に歯止めをかけるように、北海道自然保護協会が現地調査を行ない、日本自然保護協会と連帯して「夕張岳の高山植物群落とナキウサギ」を国の天然記念物に指定する要望書を国と道に提出している。

同時に、地元の夕張岳研究グループは、国や北海道の補助金を受けてアセス調査を隠密に未公開のまま進めている夕張市に対して、「リゾート開発計画とその問題点！」を明らかにし、夕張岳の特殊な自然をあまりにも知らない、無謀な計画であると警告を発している。

これらの一連の動きの中で「ワールドスキー場

基本構想」が明らかにされたのは、一九八八年十一月の新聞報道である。企業主体は国土計画（現コクド、堤義明社長）で、総事業費は四十億円というものであった。具体的には、東西と南北に総延長八、二キロになる二本のスキーコースを設け、ゴンドラ、リフト、レストラン、駐車場などを建設するという計画であった。この案は、道立自然公園の第一種特別地域に一一、五鈔、第二種特別地域に二一、二鈔が入り込んでいた。

この計画が明らかにされると素早い反応が起き、一九八九年四月、地元で市民組織の「ユウパリコザクラの会」が発足した。会では、夕張岳の危機を訴え、夕張山岳会に協力して署名活動に取り組み、国の天然記念物指定を目標にして、世論を盛り上げる必死な活動を繰り広げた。

市民運動が高まる中で、一九九〇年一月、横路知事は「開発を認めない」見解を示した。同年八月、国土計画の堤義明社長は「開発断念」を表明した。市民団体との攻防を乗り切る形をとっていた夕張市は、その後も計画の練り直しを発言して成行きが目されたが、一九九一年二月、ようやく「開発休止」を宣言した。

こうしたリゾート開発構想により、麓のまちは幻想と現実の中で揺れに揺れた。今となっては、スキー場計画があったことさえ夢のような出来事に思えてしまうが、当時としては、大富豪を誇る堤義明社長と独裁で名高い夕張市長を相手にして、本当にかよわい「ユウパリコザクラの会」が一体どこまで「モノ」を言っているのか、全く未知数であった。

あすの夕張と夕張岳の自然を考えて

当会が発足した年は、最後に残された三菱炭鉱の延命も時間の問題とされていた。その状況の中で、私たちは運動を始めなければならなかった。

夕張市は炭都として一世を風靡し、北炭の城下町であった全盛期には炭山が二七山、人口一二万人を有していた。ところが、炭鉱閉鎖が続いて人口が二万五千人と落ち込み、翌春にも三菱炭鉱の閉山により産業基盤を失う人々は不安に駆り立てられていた。

こうした事態の中で、地域活性化の大義名分を持ち雇用対策の場となる「スキー場開発」が示されたのである。市内全域を網羅する組織の旧地区労とともに商工会議所、農民協議会、南部・鹿島連合町内会が、「スキー場開発促進要望書」を議会に提出した。議会では、夕張岳問題を口にするのは「タブー」であり、行政に相反する意見を述べると「市長にタテつく悪市民」と見られるのだ。

「ユウパリコザクラの会」は、その名が物語るように、行政とあつれきを作らないことを基本にした。「賛成か反対の意見の対立によって、まちを二分しないよう」十分配慮を置いた。とは言いながら、旧地区労が各組織を牛耳っている夕張において「自然か開発か」、「人間が大事か花が大事か」といった二者択一的な問いかけに、確かなよりどころを確立しなければならなかった。市民感情には、夕張からすべての炭鉱が失われるという「誰も経験しない時代」に突入する不安がある。最後の炭鉱が閉山になる前に、何とか「あすの夕張と自然を考えるシンポジウム」を開こうと、まさに四面楚歌の中で緊迫した準備が始まった。

シンポジウムのプログラムは、決して「スキー場反対」とは言わず、夕張岳の自然を未来永劫に残す気持ちと地域の活性化を願う気持ちが同一線上にあることを、素直に共有し合うようにした。

夕張市民と自然を憂える人たちが、二日間で二四〇人も集まった。記念講演、スライド会、分科会などで熱い討議が交された。「レジャー産業というのは地域のために来るのではない」、「自然は所有権のレベルを超えて社会のものである」など、多くを学ぶことができた。私たちは、苦しい状況の中で一番失ってはならないものは何か、深く考えることができた。このシンポジウムの成功は、当会の本当の意味での出発点となったと思う。

手作りリゾート

象徴的なものをただ「守れ！」といっても、まちの人々に容易に受け入れられるものではない。日本一の過疎化にさらされる夕張の運命共同体としての宿命を背負い、私たちは次の課題、自然環境を守りながら地域活性化に結び付く本物のリゾート開発とは何かを考える講演会を企画した。私たちは、立場や考えの違いを超えて、広く市民と夕張の真の活性化を考えていきたい思いから、北海道自然保護協会の講演会を夕張会場にお願いし、札幌でも同じ講演会を開いた。

講師の保母武彦氏（島根大学教授）は、美しい湖、宍道湖を干拓から守る運動の先頭に立ち、ついに国の閣議決定を覆して干拓事業を凍結、中止に追い込んだ実績や、「民活リゾート」よりも地域の環境と資源を住民自身で保全、管理、改造していく「住民自治」が必要であることを説いた。

その二年後には、宮本憲一氏（当時大阪市立大

学教授)を迎えた。「環境保全と内発的發展論」とは、地場産業を育て自らの力で地域を創造すること、「リゾート法」と五原則についてなど、多くを学んだ。まちの九〇%が国有地で、森林伐採量が全道一を誇ってきた夕張市は、地底から石炭を、地上から森林、砂金、化石、岩石など、これまでに膨大な資源を市外へ搬出してきた街である。自然環境を考えることは、「月並み」に人を育てあうことにつながってくる。宮本氏は、いみじくも「煩わしい付き合い」を私たちが続けていくなら、「力は時」であると、耐える方向を示唆してください。

#### 登らせよう会

夕張市が「開発計画の休止」を発表した一九九一年、北海道教育委員会による現地調査が行なわれた。これを機に、「指定の要望書は市教育委員会で作成してないので」と曖昧な態度であった市教育長と、「指定と保護」についての会談を持ち続け、共通認識を作ろうとした。

市内に夕張岳を紹介するパンフレット類はなく、夕張岳について知らない人が多いので、先ずスライド行脚を試みた。ほとほと骨の折れる市会議員から教育委員、関係ある役所各課と観光協会事務局、そして空知支庁、営林局にも行脚を行なった。その際、荒廃した登山道や木道、トイレ、ヒュッテ、看板、盗掘跡など、登山口から頂上までの現状をスライドで説明した。そして、急務の保護対策は「行政と民間が一体で行なうこと」を提案し、「視察登山」を働きかけた。こうした努力が夕張市文化財保護委員会との合同視察登山の実現に結び付いた。登山後のまとめに基づいて、保護対策

は「できるところ」から手をつけていくよう、提案と情報交換を頻繁に行なった。

新教育長を迎え、まだ夕張岳に登っていない教育長のために「登らせよう会」を企画した。その結果、北海道自然保護協会の理事有志や市文化財保護委員長と共有体験を持った教育長は、「生きていく自信がもてた」と感動あふれた感想を語った。その後の会議や集いにおいて、体験談を話す教育長の影響力は大きかった。感動は活動の力を生む。登らせたい人は、まだまだいる。

#### 南富良野町の皆さんと

夕張岳の山頂付近(第一種特別地域)は、山稜をほぼ行政境界にして、東側が南富良野町、西側が夕張市にまたがっている。登山道は夕張市だけではなく南富良野町金山からもある。会では早くから南富良野の町民と交流を望む意見があったが、その機会を逸していた。

先に述べたように、「指定」がいっこうに進捗せず、会で要望書を提出していた各関係機関への行脚を行なっていた。その際、北海道営林局では協力的で詳しい説明があり、「地元からの要望がないと動けないこと、地元の熱意がほしい」と要望された。意を決して三月、南富良野町と金山営林署を訪問して私たちの熱意を届ける。一方、南富良野の町民の方々とも話し合う場を設け、当会が辿ってきた活動を説明しながら交流を深めた。

新たな「南富良野町教育長を登らせよう会」の願いがかなない南富良野の皆さんとの交流登山会が実現した。七月の高山帯において、当会の本城代表が「指定」に向けた状況を説明する。ともに地元同志、山稜から両側を見ながら、「ここが南富



写真4 南富良野町の皆さんと交流登山 1994年7月  
蛇紋岩崩壊地で説明する本城代表

良野町、こちらが夕張市」と夕張岳の岩肌を手でなぞる。思いが通じ合うような懇談があった。夕張岳の「指定」に労を厭わず、行政と町民の両方に働きかけたことで、遠い存在の夕張岳が身近に感じられた。何よりも南富良野町の皆さんと仲良くなれたことが、素晴らしい財産となった。

#### 夕張岳関係者協議会

文化庁の考えは、「指定は民主的に進めたい、指定後の文化財を未来に大切に引き継ぐため住民の意識の高まりを作り、地元から要望が出るのを待つ」というものである。夕張市が提出した「要望書」には、「管理と保護対策は国と道が万全に、指定は国と道の責任で」という要望の他に、「環境保全と開発に配慮し地域範囲を指定」という難解な内容が含まれていた。このため、市全体が要



写真5 夕張岳関係者協議会 1994年11月

望書提出後も消極的なままであった。私たちは、「この要望書を咀嚼し、地元が主体的に立案すべき」と途方もない根気を持って、協議の場の必要性を提言してきた。

一九九三年五月、市教育長が座長で「関係者協議会」が開設された。メンバーとして空知支庁、夕張宮林署、市教育委員会の社会教育課と体育振興課、市役所の道立自然公園担当課、夕張山岳会、当会の七団体と市文化財保護委員長が入った。

(国や道)に押しつけては進まない。この協議会の「実」は、行政と民間団体が同席し、行政側は住民の熱意を受け止め、それぞれの団体は保護活動に乗り出して、「指定の受け皿づくり」を始めることであった。私たちは、このような協議会が今後北海道レベルで設置されることを要望している。

#### 一枚岩に

「黒いダイヤ」がもてはやされた炭鉱の歴史が、一方で人間の尊厳の犠牲を強いてきたことは、市民にとって今日でも強く認識されている。それ故に先人たちの苦労を偲びつつも、昭和二四年頃に天然記念物の「指定候補」にあがりながら消滅したという過去の無念さを感じる。私たちは寡黙なヤマ男たちの哀感にふれ合い、まちの人々の視線でとけあい、夕張の皮膚感覚をもって行動してきた。その視点によって、歯車が動きだしたと思う。

幸いにして、市外の会員や自然を憂う人々との連携は、当初から視野に入れることができた。人々とのネットワークが拡大し、一九九二年十月から基金による運動に取り組んだ。日本自然保護協会の助成を受け、「夕張岳、高山植生の保護と適正利用のための活動」を始めた。学習登山、気象調査、看板の製作と設置、パンフレットの作成と販売、野坂志朗氏(当時愛知教育大学教授)による講演会など、多くの活動を通して夕張岳の保護を登山者や関係機関にアピールすることを目的としたのである。

一九九四年度は、北海道新聞野生生物基金の助成を受けて、夕張岳の移動写真展を夕張、南富良野、北広島そして札幌で開催した。この写真展と



写真6 「夕張岳から北海道の自然環境を考える札幌シンポジウム」 1993年10月

一昨年に札幌で開いた「夕張岳から北海道の自然環境を考えるシンポジウム」には、北海道の後援がありメッセージも寄せて貰った。次年度は、日野自動車グリーンファンダ助成によって、高山植生の保護活動の継続と「環境保全教育のための活動」を行なう予定である。

各地の会員の方がこうした活動の広がりをつくり、地元と絆を強めている。つねに、人とのつながりを大切に思い、旗幟鮮明で、活動はガラス張りにして、心しなやかに行政と多くの市民を巻き込んで信頼関係を築いていきたい。夕張岳のために「ボランティアで何かをしたい」人が地域を超えて見えてきた。私たちは、「指定」を受けた後のことも考えながら、「住民の熱意」を一体にして行政を動かしていくため、絶えない活動を続けていこうと思う。